

## ヨーロッパ特許庁の特許調査セミナーに参加して

六車正道\*

### 1. はじめに

3月末、オランダのハーグにあるEPO DG1（ヨーロッパ特許庁第一部）で、5日間にわたり特許情報の利用についての出願人向けのセミナーに参加したので、その一部を紹介する。

特許関係者はよくご存知のことと思うが、EPOは、出願の受け付けや審査は西独のミュンヘンにあるEPO DG2～DG5で行い、特許登録にあたいする新しい技術かどうか調査するのはオランダのハーグにあるEPO DG1で行っている。EPO DG1の職員は単なる調査だけでなく、どのクレーム（権利請求範囲）に公知資料のどの部がどの程度関係するか報告するので、サーチャと言わずに審査官（Examiner）と呼ばれる。またこのEPO DG1は、1977年までフランス、オランダ等の特許庁に対する新規性調査のための機関であったIIB（Institute International des Brevets）を資料、人材ともに引き継いだものである。IIB時代から、民間からの委託調査を受けており、特許調査の代表的な機関として信頼されてきたところである。

今回のセミナーは物理、電子関係の出願人を集めたものだが、昨年は化学関係を集めて類似のセミナーを開いたそうである。約30人の出席者の内、2/3のみが出願人側で、他はEC諸国の特許庁からの主席者であった。日本へは出願の多い数社に招待状を送ったそうだが、出席したのは一社だけであった。出席者の関心は、ごく一部を除いては、調査やオンライン検索など特許情報の利用に的を

絞ったものであった。

### 2. EPO DG1の強化

セミナー全体の目的はEPOの調査の現状を出願人に紹介するというものであった。しかし私の受けた印象はそれだけに止まらず、今後はEPOがECの特許は面倒みていくから各国での心配はご無用、という事を印象付けるための企画のようにさえ思われた。その理由を考えてみると、たとえば、(1)ヨーロッパの民間ではまだそれほど使われていないような光ディスク等をうまく使って日本特許を利用するシステムの開発、(2)内外のデータベースを自在に使いこなす総合的なシステムの開発、(3)キーワード検索の一種だが自動検索的な試みなど手めぐり中心からコンピュータ利用への大転換の様々の試み、(4)セミナー出席者が出願人だけでなく1/3の出席者はEC諸国の特許庁審査官であった等々、あげられる。

また、セミナーのチェアマンは関係者の中では最も若い、35歳前後と見られる審査官がまかせられていたり、壁に張られた独特のデザインのEPOの大きな旗などから、EPOの意気込みを感じさせられた。



図1 EPOの大きな旗を掲げているセミナー室

\* むぐるま まさみち (株)日立製作所知的所有権本部  
特許情報グループ  
〒317 茨城県日立市幸町3-1-1  
Tel.(0294)21-1111 (原稿受領 1990.06.18)

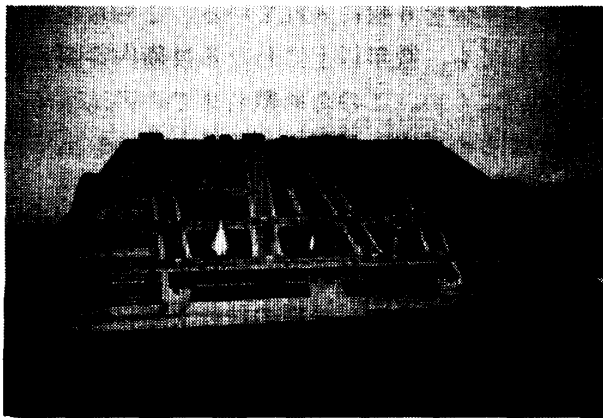


図2 新しく計画中の EPO DG1の模型

EPO DG1には現在約1,000名の職員がいるが、徐々に増加しており、数年のうちに大幅（ある意見では約2,500名）に増やすという。このため現在、EPO DG1の向かいに5階建てのビルを作っており、電気関係の審査官を配置する計画という。また、5年以内に、現在の25階のビルからまったく別の場所にEPO DG1全体を移す計画がある。その建物の模型によると、高さは5階程度だが、長さ200mを越すかと思われるようなビルを、縦横に4つずつ、ただし直角ではなく少し角度を違って組み合わせ、また円錐形の会議場などを持った、独特の形をしたものである。また、西独にあるEPOも2、3年以内に市の反対側に移るという事であった。出願件数は今後数年間に倍増すると見込んでおり、これらの新たな施策で対応していくのであろう。

### 3. 調査のコンピュータ化

EPO DG1は2年前に、手めくり調査中心からコンピュータ利用に大きく方針を変更したという。EPO DG1は手めくり調査を行うから信頼性が高いと考えていたので、これからどのように変わっていくか、大いに興味の持たれるところである。

すでに主要メンバーは一人に一台のパソコンか、ワークステーションを使って仕事をしている。1988年末で、700の端末と、400のパソコンが設置されているという。これらは単独でも動くし、トークン・リングLANでEPO DG1内のホストにもつながっている。電気、化学関係ではかなり役に立っているとのこと。今後さらにコンピュータ化

を促進して、急速に完全な一人一台の体制にもっていくということである。

現在の検索手法の中心はキーワードや、化学分野の特殊な技術コードであり、われわれと基本的な違いはない。ダウンロードに要した時間（出力に使った時間かと思われる）は、昨年は3,500時間に上ったという。

しかしEPO DG1が、現時点で頼りにして使っているのは、分類仕分けされた資料による手めくり調査であり、コンピュータ検索はまだ補助的な段階であることをたびたび強調していた。確かに、たまたま会った機械関係の審査官に聞いたところ、その審査官はコンピュータ検索は使わずにもっぱら手めくりで調査しているとのことであった。とはいえ、紹介される内容のほとんどはデータベース利用などコンピュータを利用する種々の新しい技術であった。

ある機械制御の審査官の部屋を、見せてもらった。約6×8 mの部屋に観葉植物がゆったりと置かれ、カーテンが半分閉じられた窓に向かって彼の机とその脇にパソコンの載った机が置かれている。斜めに女性秘書一名が別の机といすに座っている。またパソコンはEPO DG1のセンターにもつながっている。彼の机には調査依頼書のような書類少々と、調査中のような文書が約30センチ積み上げられていた。

### 4. コンピュータ利用の新しいシステム

セミナーで公表された新しい試みの幾つかをそのニックネームと共に簡単に紹介する

EPOQUE…内外の検索システムに接続して検索を進められる総合システム。将来はこのシステムに接続するだけで、EPO DG1の内外のデータベースに接続できるようになる。これを使うと、各システムのコマンドは標準化して利用できる。

CEASER…業務管理システムのようなもの。調査は手めくりを使ったとしても、調査結果の報告はパソコンでセンターへ送信し、センターでEPO DG1のいわゆるサーチレポートが紙で作成される。

ECLA…IPC（国際特許分類）を細分する形の

EPO 独特の分類体系で、ドットによる階層区分がされている。日本特許庁での FI タームに相当する。EPO 職員は資料が使えるが、出願人や外国の特許庁ではフランスのデータベース QUESTEL を通して利用できる。スウェーデンの審査官の話では、まだ蓄積が少なく、実用にはなり難いとのことであった。技術分野によっては使えるところもありそう。

ICIREPAT タイプの検索システム…“深いインデクシング方式”は八つの技術分野で古くから実施しており、現在はオンライン検索で利用できるようになっている。1件当たり、10~30の索引語が付いている。しかしこの方式はコストが高く、現在新たに開発中の技術分野はない。

DATIMTEX…印刷の直前にキーボード入力していたのを、今後は出願受け取り直後にキャラクター化する計画。これまで、OCR で変換していたのでうまく行かなかった。しかし今後はインテリジェントなシステムを採用して改良するので、タイプフェースの違いによる読みとり不良の問題はなくなり、出願書類の品質さえ確保できれば、90%がうまくキャラクター化できると考えている。したがって、フロッピーによる出願は不要である、としている。しかし出願書類の品質の確保の問題があるようで、これですべて解決ではないようだ。一部の関係者が不在で詳細は不明であった。

CD-ROM：明細書と、抄録の二つが作られている。日本国内での利用に関しては、国内で入手可能な装置構成など、仲介代理店が種々の検討を進めている。価格は若干高くなると思われるが、今後も利用上の便宜を図ってもらえることを考えると、これらの代理店経由で利用する方法を進めたいと考える。

ESPASE/CD-ROM…題名を含む書誌データはコードで、明細書などはイメージデータで入力している。1枚当たり1,000件しか入らないので、年間50~60枚になるが、この方法を当分進めるようだ。印字の画質はかなり良好、印字速度は30秒/頁。ただしプリンタの選定で、高速化も期待されている。

FIRST/CD-ROM…1件1頁のフロント頁のみ

を、1年分を6枚に入れている。こちらを使ったとしても、数年以上にわたる技術内容調査には使いにくい。このため題名までの書誌事項のみをまとめてCD-ROMで発行する話も出ている。

EPOS…オンライン検索のキーワードの同義語をあらかじめ研究しておき、検索するとき役に立てようとするもの。一般の技術文献に較べ特許文献では非常に多くの表現があるので、特に必要である。また、紙の資料による調査では、資料を見ながら特許分類などを決めていく事ができ、調査者は“受け身”の姿勢でよいが、オンライン検索では検索者自ら必要なキーワードを明らかにしていく“アクティブ”な姿勢でないとい調査ができないと説明された。まだ試みの段階。

言語の混在…20%のドイツ語出願、10%のフランス語出願があり、英語に統一しての明細書のフルテキスト検索は難しそう。自動翻訳も試行している。1991年には、全抄録を英語で提供できるという。

自動検索の実検…ある技術の範囲内で、ワード間の関連度をあらかじめ決めておき、与えられた1件の特許抄録を入力すると、その特許のもっているキーワードの分布に似た分布の特許を、関連特許として10数件出力する。まだほんの試み程度の入力件数であったが、開発している審査官は、それでも一部実用になっているとのことであった。

JABS…日本公開特許の英文抄録資料は仕分けされていないので、EPO DG1の中のシステムでオンライン検索によって利用している。

JIMA…縦長のディスプレイに、図面を上、抄録を下に一緒に表示する。図面を入れている OD (Optical Disk, 光ディスク) は、片面に図面のみイメージで入力して使っているもので、3.6 KByte/図が必要であり、200K 件/枚が入力可能。よって、日本公開の全件が、数枚の OD に入っている。ジュークボックス型ではなく、固定セット型であるので応答は速い。現在はパイロットシステムなので、スタンドアロンで動いているが、将来は ETHERNET<イーサネット>

でIBM3270メインフレームに結合する。抄録、  
図面ともに JAPIO から送られたデータ。

西独特許庁…帰りに立ち寄ったところ、民間から  
直接、特許庁のデータベースに接続できること  
を知った。すでに欧米の企業、数百社が接続し  
ているが、日本からの接続はない。ドイツ語で  
抄録は入っているが、キーワード検索はできな  
い。審査経過を最も早く入手できるものとして  
価値がありそう。

ORBIT での INPADOC…外国の審査経過がかな  
り詳しく出力されている。また、対応特許調査  
では、回答件数をみた後、回答内容を見るため  
に30\$支払うかとの問い合わせに応じて“Y”を  
入力することで、そこで初めて対応特許調査の  
特別料金を支払うことになる。これは日本で現  
在使えるシステムに較べかなり使い易いと感じ  
た。

## 5. オランダの風土と生活

EPO DG1は、英語、ドイツ語、フランス語およ  
びオランダ語のできる事が職員採用の条件とい  
うことで、10数年前、大いに感心した事があつた。  
しかし、オランダの学校では言語教育に力をいれ  
ており、中学を卒業すると普通の人は、オランダ  
語のほかに英語とフランス語をしゃべれるとのこ  
と。またオランダ語とドイツ語はお互いに理解し  
合えるほど似た言葉であることを聞くと、納得す  
ると同時に、同じ通商国家として、わが国の言語  
教育を思い出さざるをえなかった。花屋の店員、  
八百屋の主人もバスの運転手も町であったほとん  
どすべての人がきれいな英語をしゃべっていた。  
(EPO DG1では、オランダ人そのものの採用比率  
はそれほど高くない。)

25階ある EPO DG1の最上階からみると、  
確かにオランダは干拓して国土の1/4を作ったと  
言うことが理解できる。やや郊外のため近くに高  
いビルがなく、遥か彼方まで、真っ平であること  
がよくわかる。(オランダ南部の最も高いところで  
も、300数十メートルしかない!)そして EPO DG1  
の付近も海面下4~6メートルにあるため、排水  
用の大小の水路がいたるところに作られているの  
がわかる。

ハーグ付近は地下50メートルまで砂地であるた  
め、地下鉄は作れないのだという。道路工事など  
やっているのを見ると、30cm 四方のコンクリー  
トの角材をどけるとその下はすぐ砂であり、数  
メートル掘っているのを見ても確かに砂ばかりで  
ある。とても日本では建物など作れる環境ではな  
い。地震はほとんどまったく無く、また温泉など  
もまったく無い様子。このように変化の少ない風  
土であるが故に花栽培が盛んになったという説も  
信じられそうであった。

この国の首都はアムステルダムで、政府はハー  
グにある、というような曖昧なところがある。1  
を I と書くことも平気でやっている。IPC の  
H01L を H0IL と OHP で平気で見せて、エイチ、  
ゼロ、ワン、エルと読んでいる。IPC を知ってい  
る人ならば間違えることはないのだから、どうでも  
良い事かとも思う。その一方で、十メートル程度  
を隔てて、落差が数メートルある二つの水路が接  
しており、それらの間には、昔はあの有名な風車  
で、現在は汲み上げ用の電動ポンプで、昼夜休ま  
ず排水の努力が続けられているという厳しさとの  
間に、奇妙な対比を見た思いがした。

以前から少し知っていた審査官がやって来て、  
夕食に行くことになった。この内の一人は2年前  
までのしばらくの間ミュンヘンに審査官として  
行っていて、最近こちらに来たという。まず彼の  
家に行って時間をつぶした。庭先の小道をはさん  
で大きな水路が横たわっている。この付近は、海  
面下4メートルとのこと。

2階にあがる急な階段はステップの奥行きが狭  
く、靴を横に向けようかと何度か思った。しかし  
実際に横に向けてみるとなおさら大変で、結局、  
用心しながらまっすぐ降りた。彼らも困ってい  
るらしいのだが、オランダの家はこんなのが多いと  
の事であった。人口密度は世界一と言うものの国  
土は全て平地なので、敷地も狭くはなく、室内は  
広く天井は高いし、日本で言う住宅問題はほとん  
ど無いように思えた。階段をゆったりと作ること  
は簡単なことに思うのだが、何か理由があるのだ  
ろう。慌てて階段をかけ降りるような事が少ない  
のかも知れない。そういえば、泊まったホテルも  
国際級のホテルでなかったせいも、オランダ風

(?)に階段はやはり奥行きが狭かった。

さて、一息入れて階段に注意しながら表に出ると、左前方から水路沿いの並木が音もなく、すうと近づいて来る錯覚に一瞬とらわれた。それは幅10メートル以上もありそうな、しかもあと30センチで地面に溢れ出そうに満々と水をたたえた水路の幅いっぱいとお勘違いさせるほどの幅を持った大きな船が、ほとんど音もなく進んで来る姿であった。よく見るとそんなに大きな船ではないのだが、こんな内陸部でしかも住宅地を、船が運行すると言うのは日本ではとても考えられず、まったく驚いた。人工の水路のため川岸や川底に凸凹が無く、また勾配がほとんど無いからできるのだろう。

アムステルダムへのバス旅行が準備されており、途中、風車記念館のような所に立ち寄った。水路は数メートルの落差をもって3段(特に低い場所では5段)に構成され、少しずつ高い位置に水を押し上げ、一番高い水路から海へ水を捨てるシステムになっていることを知った。風車はその昔、この排水のための水汲み上げ動力であった。

ある審査官がオランダ人の面白い生活習慣の一つを話してくれた。バスの窓から道路ワキの5、6階建てのアパートらしき住宅の窓が見えるのだが、その窓のほとんどが白いレースのカーテンを左右に束ねており、カーテンが閉まっている窓がほとんど無い。もちろん雨戸もないので午後11時なのに部屋の中が見えてしまうのである。

ところで、なぜこのようにオランダ人は夜になってもカーテンを閉めないのでしょうか? 彼に聞いても、自分はベルギー人だから知らないとのこと。しかし私は、すぐピンとくるものがあつた。つまり、オランダの多くの部分は海面下数メートルにあるために、いつも堤防の決壊を注意しておらねばならなかった、そのため夜でもカーテン

を閉めずに生活する習慣ができてしまったのではないかという、私の解釈だ。彼はそいつ面白いとは言ったが、正解だろうとは言わなかった。(この小話、どこかで聞いたような気がする。)

11時過ぎ、ホテル近くの路地で路上駐車の利用車のためバスが進めなくなった。EPO DG1の4、5人の職員が出て行って、慣れた手つきで上下に大きく揺さぶり上に上がったところで、更に持ち上げて少しずつ横にずらす方法で、4、5回くらいも繰り返してすっかり横へかたづけしてしまった。その方法は、EPO DG1の新発明だそうだ。(しかし、まだ新規性は調査されていない。)

最終日、若干の時間がとれたので、司法裁判所の置かれている平和宮殿(Peace Palace)に行った。奈良の大仏殿を思わせる大きな建物である。案内のおじさんは初めオランダ語で、ドイツ語がいいかな、と聞いて手をあげさせ、結局そのとき集まっていた20数名の最も都合の良い英語で説明してくれた。この平和宮殿は土地、建物を初め、内装品や飾られている彫刻などもほとんど全てが各国、または個人からの寄贈品であり、世界平和の象徴のように思われた。

見学の最後にすばらしい一室をおみせしようと正面2階の大きな部屋にゾロゾロと案内された。全体を落ちついたモスグリーンをベースに、金銀朱の刺繍の壁飾りや椅子があり、高さ2メートルもありそうなきらびやかな色調の花瓶の焼き物などが置かれた、確かにすばらしい部屋であった。そしてそれらは、第2次大戦の戦後復興によくめどの立った時期、日本から贈られたものであるという事であった。もうけ独り占め等と後ろ指さされかねない昨今の事情を思い、国際メンバーの一員として応分の貢献をしていることに、いくらかの安堵した気分になった次第であった。

### An Impression on Seminar for Applicants on Search and Documentation working Methods, Masamichi MUGURUMA (Hitachi, Ltd.)